

農村における地域活性化と地域社会活動

農村生活総合研究センター 荒樋 豊

日本の経済発展の陰で、今日の農業や農村は停滞状況に置かれている。とりわけ人口流出によって過疎化が進行した条件不利地では、高齢化を伴ないつつ深刻な事態に立ち至っている。このような中で、地域住民の生活を守るためにさまざまな地域おこし活動が各地で展開され、地域社会の建て直しが模索されている。

過疎地域における今日の地域活性化の最も基本的な課題の一つは、条件不利といった環境のなかで当該地域の諸条件と時代状況を勘案しながら、基幹産業の振興、地域資源の今日的活用、手作り観光リゾートなどによって地域経済の振興を図っていくために、いわゆる心の過疎の脱却に向けた住民の再組織化と新たなネットワーク化といった形での社会関係の再編が重要である。すなわち、地域活性化のために、住民自身の地域社会への関わりを強化し、住民の地域社会活動を建て直すことが必要となっている。

このために、住民が地域社会の維持や親睦を図るために行なう日常的な、地域社会に関連する活動（＝地域社会活動）に注目したい。今日展開している地域社会活動は、その活動内容によって古い伝統的な共同体的な志向性をもつものと新しいコミュニティを志向するものとの2種に分類できる。この点をまず、全国の過疎市町村に対して行なったアンケートの分析結果から押える。地域社会活動の各項目はそれぞれ人口減少率や高齢人口指数等との関連から多様な結果を示すが、住民が直接に担う地域社会活動が一定程度維持されていることのうちに、今後の地域活性化に向けた活動を展開する基盤、連帯の潜在的賦存性を示すものと考える。

この上に立って、事例として2つの村落をあげて、地域社会活動のあり方と地域活性化との関連を検討する。一つは村落レベルの地域社会活動と対抗関係を持ちながら、村落範囲を超えて地域活性化活動を展開している長野県栄村の村落の事例である。もう一つは、地域社会活動の着実な展開として、村落範囲で村おこし活動を行なっている新潟県高柳町の村落の事例である。これらの事例から地域社会活動の差異やその影響のもとに行なわれる活性化活動の違いを主に検討するが、両者を通じて、地域活性化の一般的基盤をなすものは地域住民の自発的、主体的な参画であり、このような自発的参画を進める上で地域社会活動の存在は重要な要件である点を検討する。